

# 上映映画解説

1957, 2~3

国立近代美術館 フィルム・ライブラリー



No. 45

## マダムと女房

### 「マダムと女房」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーの特別鑑賞会では、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画をとり上げてきました。今回はその第二五回として、二月二四日から三月二七日まで、毎週二回（日・水曜日の二時）五所平之助監督の松竹映画「マダムと女房」を上映します。

### マダムと女房

六巻

松竹蒲田一九三一年作品

#### —— スタッフ ——

原作並脚色者……………北村 小松  
 監督者……………五所平之助  
 撮影者……………水谷文二郎  
 ギャグマン……………伏 見 晃  
 録音技師……………土 橋 武 夫  
 音響監督……………土 橋 晴 夫  
 ミックス……………狩 谷 太 郎

#### —— キャスト ——

劇作家蘆野新作……………渡辺 篤  
 その妻……………田中 絹代  
 隣のマダム……………伊達 里子  
 隣の少女……………井上 雪子  
 娘テル子……………市村美津子  
 音楽家……………小林十九二  
 同……………関 時男  
 友人……………吉谷 久雄  
 同……………月田 一郎  
 運転手……………阪本 武  
 見知らぬ男……………日守 新一  
 画家……………横尾泥海男

### ▲解説▼

この映画は、国産の土橋式ホーンによって作られた、日本における最初の本格的なトーキーとして、日本の映画史の上でもエポック・メイキングな作品です。封切は一九三一（昭和六）年八月一日に、丸の内帝國劇場で行なわれ、欧米のトーキーに匹敵出来るものとして、大きな反響を呼びました。この「マダムと女房」を機として、松竹をはじめ日活その他諸会社でもトーキー製作が盛んに行なわれるようになり、日本の映画界も漸くトーキー時代になって行ったのです。

この映画の内容は非常に簡単なもので、文化住宅に住む劇作家夫婦が、ジャズ狂の隣のマダムに悩まされるという小品の喜劇です。

封切当時の批評にも「音を得た嬉しさから、必要以上に音を使用し、台詞の数も亦必要以上に多いことは認められる」（田村幸彦「キネマ旬報」昭六、八、二一号）、「人物の微細な心理の動きなどの描写がおろそかにされ、『歌のための』ジャズのための』画面になりがちな危険性はある」（和田山滋、同誌昭六、八、一一号）等の欠点が指摘されていますが、それぞれ最大級の讃辞を与えています。

### 「マダムと女房」の生れる頃

池 田 義 信

その昔。無声映画時代。映画に同時音があったらいいなとは、映画を見た者の誰しもが、恐らく一度は夢に見たことだと思ふ。

日本映画では、数人の弁士が居て、俳優の演技に伴って声色をつかい、お囃子擬音などをあしらって、全く演劇形式によって映画が公開されて居た。

いわゆる「玆に御紹介いたします大活動写真新派悲劇は×××全十巻弁士総出声色鳴物入りを持つ

て御覧に入れますれば何卒最後までごゆっくりと御覧のほどを………」と云うような主任弁士の挨拶から映写が始められたのである。

外国映画にあっては、映画の内容を画面を追って伴奏をつけ物語風に説明し、心理描写や環境説明などを加え、さらに美しい歌い文句をうたって観客をうならせたものである。

一方連鎖劇と云う映画と実演とを織り交せる形式、連鎖劇と云うからには演劇に映画を挿入したこととなるが、実演の舞台場面は見せ場とする二場面くらい、あとは映画のフィルムで筋をつなぐ、これは主として海岸の場面や、温泉場の場面など、舞台で効果の上らない場面をロケーションで撮影し、それには出演俳優自身がセリフをつける。そしてスクリーンがパッと上ると舞台でそのつづきが始めると云うぐあいである。私はカラーのワイドスクリーンでこれをやったら面白いなと今でも思っている。これ等は何れも映画に音がほしい、又は音による効果の変形的な欲求から自然に考えられた結果だと思ふ。

各国でも伴奏によって見せて居たり、映写の始めに先づ解説をしてから見せて居たりして居たようであるが、それが、やがて、サブタイトル（説明字幕）やスロークロネイズさせて同時音を出そうと試みられたのである。日本でも大正二年頃既にその方法が試みられて居るが、これは実際の上には成功しなかったし、随ってまた一般公開して興行的にまで実用化される段階にはいかなかった。

これ等もすべて映画に同時音が欲しいと云う一つの欲求から来てるものである。

「マダムと女房」が作られたのは昭和六年で、これを誰でも日本に於ける本格的トーキー映画の第一作と云うことに對しては異存もなく、日本映画史上に明らかになされているが、当時、また、それより以前に於ても種々な形式による録音技術が研究され、それによる試作品も作られて居たのである。

先づ外国のシステムをとり入れたミナトーキーと云うのが昭和二年に「黎明」と云う作品を発表している。これは正式に公開されなかった。それから松本幸四郎（先代）「素袍落」が作られた。

その後、水谷八重子の「大尉の娘」五月信子の「仮名室小梅」市川小太夫の「中山七里」田谷力三で「もの云わぬ花」日活との提携作品で溝口健二監督、藤原義江「ふるさと」などがあるが、何れもこれは失敗作と云われている。昭和三年には純日本式と云うイーストフォオンが「戻り橋」「蜂須賀小六」「子守唄」などを発表している。しかしこれも全く失敗に終った。ただ、もの珍らしいと云うに過ぎなかった。てんで音と画面とが合わなかったとのことである。

このように作品は作られているが、その何れもが、ただ映画に音が伴なうと云う程度の試作品的なものに過ぎなかったもので、それが今はほとんど忘れ去られてしまっているが、当時はきつと涙ぐましいほどの努力をみんなつづけて居られたことと思う。

「マダムと女房」は土橋式松竹ホーンと云うので、土橋武夫君兄弟の発明によるものであった。この機械の構造については誰にも見せない。録音室に關係者以外への出入は禁ぜられる。何かのことで他人がどうしても録音室に這入らなければならぬ時は、機械に黒いビロードの布を掛けて見せない。いっさい秘密主義、音についての絶対権威者であった。先づ防音設備の整っ

たスタジオが必要である。蒲田撮影所の一角に仮スタジオが出来て製作が始まった。カメラの回転音が出るので、カメラを入れるボックスを作る。スタジオの外を歩く音が這入ると云うので赤い旗を持ったオヤジが交通整理をする。どんな偉い人が通ってもどなりつけられる。たいへんな騒ぎである。

こうした騒ぎの中にあつて、ともかくも五所君を始めそのスタッフは、新しいこの仕事を成しとげたのである。今から考えるとほんとに夢のような話である。

当時の蒲田撮影所長は現松竹社長の城戸さんであり脚本を書いた北村小松君は作家として活躍して居られ、主演女優の田中絹代君は茲に云々するまでもなく、女優としてまた監督としてもその才能を發揮し女流監督として名作をものしている。渡辺篤君、日守新一君も共に健在で特殊の持味を生かして幾多の映画に出演している。

「マダムと女房」の公開によって日本映画のトーキー化が活潑になり、それによって説明者や映画館業士の失業問題も起つてその頃の映画界を騒がせたものである。

松竹トーキー映画製作につづいて日活、また東宝の前身たるPCLもトーキー映画の製作を開始し日本映画もようやくトーキー映画時代の全盛期に到達したのである。

いま、また、カラー映画の全盛時代からいよいよ大スクリーン時代に移らんとしている。

松竹も、東宝も、大映も、東映も、新東宝も、日活も、いろいろのシステムによつて大型映画の製作を開始し、また開始しようと研究している。

映画渡来六十年と云う、今年は大形映画の現出によつてまた日本映画の歴史を大きく飾ることと思う。